

カトリシズムの場合

生長の家を受容した人びとの多くは、具体的な救済体験よりも救済とはいかなるものかというように、教義を理念的・観念的に力強く語る傾向がある。その傾向を端的にまとめると、救済とは神の子として存在していること（「実相」）を感得することにある、ということになる。入信後、彼らが得ることになる個々の救済とは、生長の家の世界観の根幹にある「実相」の個別的展開に他ならないといえるだろう。

生長の家では、あらゆる宗教は宇宙に漲る大生命としての神から発せられる救いの放射光線だと理解し、他人の宗教を誹らず、むしろ敬うことを奨励する。そのうえで、あらゆる宗教は一つだという「万教帰一」の立場に立つ（谷口 1997: 8）。教祖谷口雅春は、仏教、神道、キリスト教の教えをシンクレティックに体系化した。ブラジル人信者は聖書を引用して信仰を語る事が多く、生長の家こそが正しくキリスト教を説いていると言わんばかりの印象を与える。生長の家が天理教や PL 教団に比べてブラジルで受容され易かったのはシンクレティックな教義体系にあるのは明らかだが、その一方で心靈主義という重要な要素も存在する。心靈主義に関しては稿を改めて論じよう。

さて、信者の語りは叙述的というよりも理念的・観念的である。集会を取り仕切る講師は「生長の家は人生哲学で宗教ではない」と言うことが多い。そのためか信者の間では「人生哲学」という呼称が頻繁に使われ、自ずと理念的・観念的な語りになるように思われる。

熱心なカトリック信者だったというマリザは、子供の頃から聖歌隊のメンバーとして教会に通っていた。彼女の子供が結核を患って病院に入院しているとき、そこに置いてあった雑誌を読んで生長の家に関心を持った。病院の医師は、生長の家の雑誌を購読するカルデシズム信者だったという。それから後、彼女は生長の家の集会に参加するようになった。

キリストは、「私は道であり真実であり命である」と言いましたが、「私は唯一の道であり、唯一の真実であり、唯一の生命である」と言ったわけではありません。仏陀はキリストが生まれる前に生きていました。仏教もその道の一つなのです。谷口雅春は、生長の家があらゆる宗教をつなぐ金色の糸だと言っています。私にとって生長の家は宗教ではありません。今も私の宗教はカトリックです。

カトリック教会ではイエスのみが神の子どもだと教えていますが、イエス自身が聖書で「私は言う、『あなた方は神だ、あなたがたは皆、いと高き神の子だ』（詩編 82: 6）」と言っているのです。ですから私達も神の子なんです。そのことを生長の家で再認識しました。だから、私もイエスと同じように「道であり真実であり命」なのです。

聖書でイエスは「だれも私を通じなければ父に到達することができない」と話を続けますが、それはイエスに現れた「真実」を通してでなければということで、イエス「個人」という意味ではないのです。「私を信じろ」というのは、「真実を信じろ」という意味なのです。

マリザのように、普段生長の家で活動していてもカトリック信者だと答える人がいる一方で、既述したように（本誌 Vol.16 No.9 の本稿表 3 を参照）、生長の家とカトリックの両方を信仰

しているという、いわば二重所属と呼び得る人がいる。どの日本の新宗教でもそうしたブラジル人信者に遭遇するものの、生長の家の場合はその傾向が特に強い。しかし、彼女の語りで明らかのように、カトリック信者だという認識があるとしても生長の家の教えに触れることによってキリスト教の信仰が変容しているのは明らかである。また、彼女の生長の家での活動状況を見る限り、もはやカトリック信者から逸脱していると言えなくもない。信仰と行動の変容を客観的に眺めると、彼女は改宗者の一人か、少なくともシンクレティックな宗教実践者である。

教義の理念的・観念的受容

ここで、マリザの語りにみられる教義の理念的・観念的受容という側面を考察しよう。彼女は聖書を通じて「神」としての「私」を自覚し、イエスと同格の者として生きるという信仰を獲得した。彼女は神としてのイエスの霊威的な力を相対化させ、神と人間の媒介者としてのイエスへの信仰を止揚する。なぜなら、イエスに「真実」が現れるとするなら、彼女自身にもそれは起こりうる、と言うからだ。「人間はイエスと同じように『道であり真実であり命』」なのである。彼女は生長の家で学ぶことにより、本来のあるべき姿を自覚できるようになったという。それは彼女の言葉を借りれば彼女自身に現れ得る「神の子」という「真実」（＝「実相」）の自覚である。そして、そのような感覚の獲得が、彼女をはじめ多くのブラジル人信者の宗教的救済になっている。

どの日系新宗教でもブラジル人信者の多くは、人間は罪の子供だと神父や両親に聞かされてきたと語る。「悪いことをすると地獄に墮ちる」と恐怖心を植え付けられたと述懐する人も少なくない。罪の子供としての人間、罰を与える存在としての神、という認識が彼らの間で共有されてきたわけである。しかし、生長の家では、そのように否定的に語られる人間像、その根拠となる「恐るべき神」というイメージが払拭されている。それは、「人間罪なし」という教えに起因する。人間が「神の子」なら、「罪の子」ではありえないのだ。

生長の家で、私は神とより近い関係が結ばれるようになりました。神は偉大な父だと理解していました。でも実際にどこにいるのかわかりませんでした。生長の家で私のなかに神様がいて教えてもらいました。となると、私自身が運命の責任者になるのです。聖書には次のように記されています。

神の国はいつ来るのかとパリサイ人が尋ねたのでイエスは答えて言われた。「神の国は、見られるかたちで来るものではない。また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」（ルカ 17: 20～21）。

マリザは、人間は自身に内在する「実相」を観ることによって運命を変えることができるという信念を持つに至った。彼女がいう「運命の責任者」の「責任」とは、「神の子」という「真理」を自覚することである。天理教や PL 教団に比べると生長の家の受容者の語りには、対人関係の修復というような道徳的・倫理的関心が低い。それは、体系的・理論的な思想を知的源泉とする生長の家の一つの展開のありようなのである。

[参考文献]

谷口雅春『生長の家とは如何なるものか』日本教文社、1997年。